

2019年10月掲載  
2021年10月改訂



大学卒業後、呼吸器内科・感染症内科医としての臨床経験を積み、厚生労働省結核感染症課で感染症危機管理専門家として活躍、結核対策など様々な感染症対策に取り組む医師

## いちむら やすのり 市村 康典

国際医療協力局  
連携推進部 展開支援課  
医師



### ★略 歴

- 2005 千葉大学医学部医学科卒業  
国立国際医療センター(現:NCGM) 内科系研修医、呼吸器内科レジデント
- 2010 千葉大学医学部附属病院  
(~2011:臨床腫瘍部 医員)
- 2011 千葉大学大学院  
(~2015:医学薬学府環境健康科学専攻博士課程)
- 2015 千葉大学医学部附属病院  
(~2015:呼吸器内科学  
~2017:感染制御部・感染症内科)
- 2017 厚生労働省健康局結核感染症課  
(~2019:厚生労働省 感染症危機管理専門家IDES養成プログラム)  
2018~2019:イングランド公衆衛生庁)
- 2019 国立国際医療研究センター 国際医療協力局 人材開発部 研修課
- 2020 岡山県保健福祉部・岡山県新型コロナウイルス感染症対策調整本部  
岡山県新型コロナウイルス感染症対策本部事務局医療調整班(出向)
- 2021 国立国際医療研究センター 国際医療協力局 連携協力部 展開支援課

### ★現在の主な担当業務

医療技術等国際展開推進事業(新型コロナウイルス感染症関連事業)  
日本の医薬品、医療機器の国際展開推進(アクセス&デリバリー)  
健康危機管理事案への対応(東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会への支援を含む)  
疾病対策チーム  
JICA課題別研修 薬剤耐性(AMR)・医療関連感染管理指導者養成研修

——市村さんが、医師を目指したきっかけを教えてください。

小さな頃から、困っていたり苦しんでいたりを助ける医師に憧れを抱いていました。医師を目指す直接的なきっかけは、将来の進路を検討していた高校2年時に祖母が脳梗塞で倒れたことです。約2か月間の看病を通して、病気になぜなるのかについて疑問を持つと同時に、病気の人をどうやって支えていくかについて興味を持ち、将来医師になることを決意しました。医師を目指しているときから、国際的に活躍し貢献することのできる医師になりたいと、漠然とした希望がありました。また、父が、十数年にわたり夏季に海外で客員教授を務め、一緒に連れて行ってもらったこともあり、父の姿を通して、国内外で海外の人と一緒に働くことを身近に感じていたのも影響していたかもしれません。

——大学卒業後、初期研修医の頃から国際医療研究センターに在籍しているのですね。

医学部を卒業し、初期研修で国立国際医療センター（現・国立国際医療研究センター）に進みましたが、その理由の1つには、国際医療協力局を学生時代に見学した際に、その活動に非常に興味を持ったことがあります。その後、同センターの呼吸器内科での後期研修（レジデント）3年目に、国際医療協力局が実施している3か月の国際保健医療協力レジデント研修の機会を得ることができました。WHO本部とWHO東地中海事務局（EMRO）で合計2か月間、結核制圧について学ぶことで、呼吸器内科医としての知識を活かしながら国際協力について考えることができました。

このレジデント研修は、将来的には国際協力を携わりたいとの思いを強くした、私にとっては大事なきっかけになりました。



レジデント研修中にエジプトでの結核のワークショップに参加

——レジデント研修終了後はすぐに国際協力を携わるようになったのですか？

将来的に国際協力を携わりたいと思いつつ、その時点ではまずは臨床医として経験や知識を積んで一人前になることを目指しました。後期研修後、母校である大学で臨床や大学院生活などで、呼吸器内科、感染管理部・感染症内科での研鑽を積みました。

それと同時に、レジデント研修で学んだ、アフリカやアジアの結核高負荷国でWHOとともに進められつつあった結核有病率調査について、内容をまとめて、国際学会で発表する機会がありました。その後、この調査に大変に興味を持ち、関連する会合にオブザーバーとして自費で参加していました。その中で、カンボジアで開催された若手のコンサルタント養成研修に参加する機会を得ることができ、その後はWHOのコンサルタントとして、アジアやアフリカのいくつかの国での調査に技術支援を行いました（所属していた大学で、これらに参加することに対して温かな御配慮を頂けたことには感謝しています）。中でも、モンゴルで現地の結核対策官とともに、子供たちのためにも対策を強化しなくてはならないと語り合ったことを覚えています。



**WHOの専門家として、  
結核の調査内容概要をモンゴル保健省で報告**



**モンゴルでの結核調査内容を、  
カウンターパートとともに国際学会で発表**

これらの活動を通して、目の前の患者さんに向かう臨床ではなく、制度などを通して間接的ではあるものの多くの人々を支えることのできる、公衆衛生に興味を持ちました。また、一緒に仕事をするのが相手国の保健省のスタッフであることが多かったため、日本での行政についても興味を持ちました。ちょうどその時に、厚生労働省が、感染症危機管理専門家（IDES）養成プログラムという、国際的な感染症の危機管理に対応できる人材の養成を行う2年間のプログラムの参加者を募集していることを知り、進路について考えました。個々の患者さんとともに治療などを進めていく臨床はやりがいもあり、臨床から離れることに悩みましたが、公衆衛生や国際協力の経験を積むのは今しかないと思い、このIDES養成プログラムに参加しました。1年目は、厚生労働省健康局結核感染症課や横浜検疫所での業務を中心に、国立感染症研究所や国立国際医療研究センターでも研修を受け、行政からの感染症管理の基礎を学びました。2年目は、英国保健社会福祉省の執行機関の1つである、イングラント公衆衛生庁に出向し、オリンピック・パラリンピック対策や感染症対策について従事しました。厚生労働省でのプログラム後には、国内の機関に軸足を置いた上で国際協力に関わっていきたくと考え、再び進路を検討しました。



イングランド公衆衛生庁にて

———再び国際医療協力局に入職しようと思った決め手はなんですか？

国際協力に将来的に関わりたいと希望したきっかけである、国際保健医療協力レジデント研修を国際医療協力局で得られたことが、一番大きかったと思います。貴重な機会を与えてくれた国際医療協力局に、いつか貢献したいという気持ちを持っていました。

また、保健分野で長年継続的に国際協力を続けている国際医療協力局の一員として、自分も働きたいと思い、縁あって、国際医療協力局に入職しました。

———今後、国際医療協力局で、どのような仕事をしていきたいですか。

国際協力という、非常に幅の広い大きな世界の中で、自分がこれまでに経験したのはごく一部のみです。そのため、自分の知識や経験を積み重ねていって、この大きな世界について、もっと学んでいきたいと考えています。今は国際医療協力局での業務を開始し、国際医療協力の道に本格的に進み始めたところですが、新たな経験ばかりで、今のところ、毎日が新鮮で刺激的です。

そして、習得したものを、少しでも将来的に貢献していきたいと考えています。今後を考えると、モンゴルでの結核担当官と語り合った、将来的な結核制圧がいつも頭に浮かびます。すべての人々が健康で日々を過ごすことができるように、結核対策を含めて国際協力に邁進していきます。



コンゴ民主共和国での国際緊急援助隊感染症対策チームの活動

最後に、これから国際医療協力の世界を目指そうとしている人にメッセージをお願いします。

国際医療協力を考えた時に、昔から漠然とした希望は持っていたものの、本格的に関わっていくまでに、私は色々な経験をしてきました。ただ、自分がこれまでにしてきたすべての経験が、現在の国際医療協力の仕事に何かしらの形でつながっていると感じています。現在、どんな分野でどのような経験をしていても、国際医療協力を目指して進んだ際には生きてくると思います。是非、一緒に頑張っていきましょう。

ありがとうございました。

#### 入局後の学び

入局後の2019年は、人材開発部研修課に所属し、海外から研修生が参加する医療関連感染の研修や、NCGM病院に所属するレジデントやフェローの医師の研修などを担当しましたが、研修参加者からの色々な目線や関心を知ることは、気づきにもつながり、大変刺激となりました。

2020年は岡山県保健福祉部に出向し、県内の新型コロナウイルス感染症対策に従事しました。地方保健行政では、国際医療協力局の業務で対象となる低中所得国と、人口規模や医療資源の状況などで共通する課題があることをこの出向中に実感しました。また、岡山県クラスター対策班の構築など、多くの方々のお借りして、もともと岡山県がもつパワーをより発揮しやすい横断的な仕組みを整備して支援することに携わることができたのは大きな経験となっています。ここでの経験が、現在取り組んでいる、日本の医療技術を海外に展開する事業の中で低中所得国に感染対策の技術を提供する仕事などに活かしています。

(2021年10月)

